

日本文学との出逢い

Paul McCarthy

皆さん、こんにちは。最初の挨拶のときだけ立って、あとは、すみませんけど、座らせていただきます。読むところもありますので、失礼ですけども、座ったままでよろしく願います。廣野先生、身に余るような、大変親切な優しいお言葉、ありがとうございました。

正式な題は「日本文学との出逢い」ですが、本当はかなりパーソナルな、個人的な話になりますので、日本文学というより日本文学者と、あるいは日本文学と関わりのある方との出逢いのところの方が多いかもしれません。では、座らせていただきます。日本文学と作家に関する私の個人的な関わりについて、聴きにいらしていただきありがとうございます。これからお話することがかなり自伝的な話になるとしたら、申し訳ありません。私は、理論というのはあまり好きではないんです。ですから、私の話は、抽象的というよりは、むしろより具体的なものになると思います。概説というよりは、特定の作家、人物、作品についての話になると思います。

初めに、私が25年ほど教鞭を執った駿河台大学に招待いただいて、教養文化研究所に感謝申し上げます。特に今年度、研究所の所長を務めておられる廣野教授は、在職中も、また、退職後も、私の良き友人でいらっしゃいます。先生からは、能の素晴らしさを教えていただきました。また私からは、キリスト教の教会の典礼、讃美歌、説教。西洋のエキゾチックなものとして、先生と奥様に興味を持っていただけたらと思って、時折先生たちを私の参加してる教会へお連れします。ですから、お能と教会と、アンバランスかもしれませんが。

ここに来るのに2時間がかかりますが、キャン

パスの美しさに大変ノスタルジアを感じます。キャンパスの美しさだけじゃなくて、飯能駅に着いて、相変わらずのスターバックス。そして、私の大好きなミスタードーナツがまだあって、それからスクールバスに乗って、本当に緑あふれる大学までの道ですね。花も多くて、今、アジサイですか。本当に自然に恵まれた環境に皆さんがいらっしゃる。私も、25年間それをエンジョイさせていただきました。

でも、キャンパスの美しさだけじゃなくて、もちろん学部の先生方、職員の皆さん、そして学生たちに対しても、懐かしく思います。今でも、廣野先生、そちらにいらっしゃる西川先生、竹中先生などと交流があつて、そして、庭山さんという元事務の方が、駿大をやめて東大に入って、今、カナダの研究を一生懸命やっちらっしゃるんですけども、その方とも今も交流があります。あと、学生は、数少ないけれども東京に住んでる人はいますし、遠く中国、あるいはブータンに住んでる人もいます。Eメールを通して、そして、ブータンの場合は、私は実際行ってお会いして、案内してもらったんですけども、学生とのつながりもある程度まで続いています。卒業後、彼らが成長して活躍していることは、素晴らしいことだと思います。

それでは、自分自身のことについて振り返ってみたいと思います。自分で言うのもあれですけども、中学・高校時代は、私はわりあい物静かで、数少ない親友がいて、真面目な生徒で、そして、非常に読書が好きでした。特に、アメリカの中西部ミネソタから遠く離れた時代と場所についてのエキゾチックな趣味は、あつたと思いますね。初めは、ヨーロッパ中世の騎士道物語。騎士、小姓

といいますか、危険にさらされる貴婦人たちのロマンスなどについての読み物です。最初の私のエキゾチズムが、ヨーロッパ中世でした。

しかし、かなり早い段階から、中学校の終わりでしたか、私の興味は、ヨーロッパから東側へと移っていきました。アメリカから見て東洋は、東じゃなくて西ですね。日本は、アメリカにとってファー・イーストじゃなくて、ヨーロッパから見てファー・イースト、極東ですね。アメリカから見てファー・ウェストです。極西ですね。とにかくアジアの方に関心が非常に強くなりました。アジアというと、当時は日本と中国ですね。私は、英訳で日本のもの、中国のものをいろいろ読みまして、両方に大変強い関心があったんです。友人に日本の方も中国の方もいました。

迷ったけれども、当時のアメリカは、中国と国交はなかったんですね。ですから、勉強しても、台湾には行けるけれども、中国大陸には決していけない。日本には行けます。日本とアメリカは友好関係にありますから、問題ないと。それから、スケールの問題ですね。中国は、大陸、本当に広大なスケールですけども、日本はイギリスと同じように列島であって、もうちょっとスケールが小さい。もうちょっと把握することができるんじゃないかなと思って、大学1年のときから外国語として、中国語じゃなくて日本語を選んだんです。少数の中国人の親友が、かなり失望したというか、私を罵ったんですけども、とにかく私は、日本語と日本文学などに専攻することになりました。

宗教と文学は、私にとって大きな関心事であります。今日は宗教の話をあんまりしなないと思います。もし質問、Q&Aのときに宗教について聞きたければ、どうぞ、できるだけ答えますけれども、今日は文学・文学者の話です。しかし私は若いときから宗教、特に日本の仏教にも関心があったということをお見せしたいと思って、21歳の時の僕が、戸越公園というところにある小さな禅宗のお寺。読めますか。ちょっと見にくいですね。東照寺という、今もあります。東照寺という曹洞禅のお寺と道場。私は、羽田から直接そこへ行っ

たんです。最初の2か月は、禅道場で暮らしました。大変でした、正直言って。だけど、終わりの方で、若いお坊さんとお寺の門の前で写真を撮りました。それで分かりますね。こういう21歳の自分の写真を見ると、時の流れを恐ろしく感じます。

大学3年生の時は、日本語の集中的勉強のために私は、スタンフォード・センターで（ICUのキャンパスにあったんですけども）勉強したんです。おかげで、専攻は英文学でしたけれども、副専攻は日本語でした。1年丸ごと日本語を勉強したので単位をもらえて、結局、副専攻じゃなくて学部専攻が二つ英文学と日本語になったんですね。

次に日本に来たときは、大学院生でした。ミネソタ大学を卒業して、1年間だけイェールに行って、イェールからハーバードに移ったんですが、修士を取って、博士の口頭試験に合格して、また日本に来たんですね。二十六七歳ぐらいでした。これは、皆さん分かりますか。かなり有名なところですよ。比叡山の西塔、西の方のですね、その中の釈迦堂です。比叡山延暦寺の西塔の中の釈迦堂を、私は1週間ぐらい泊めていただきました。そんな厳しい修行じゃなかったけど、朝晩1時間ぐらい座禅のようなことをやって、お経を上げて、そして、菜食主義でした。少数のお坊さんと、若い学生たちと一緒に過ごしました。大変いい体験でした。

私が中学校・高校時代は、英訳された日本文学の作品から読み始めました。当然、日本語ができなかった。日本語が読めるようになったのは、大学院時代ですね。ですから、最初は英訳で日本文学。古典文学に出逢って、趣味として、皆さんご存じの鴨長明の『方丈記』とか、吉田兼好の『徒然草』とか、そういう中世時代の随筆文学。あるいは、今も廣野先生のおかげで接しています、お能ですね。能楽。中世の仏教から多くの影響を受けた随筆とか能を読みました。これは、言うまでもなく、全部英訳です。

それに対して、吉野先生に悪いですけども、平安時代の物語や和歌は、英訳で読んだんですけど

ど、私にとっては優雅すぎると感じました。とりわけ純愛について深い関わりがあったり、片思いの話とか不幸で終わったり、少々感傷的と感じましたので、私の心にはあまり響かなかったですね。平安より中世、鎌倉・室町の方に引かれました。現在においても、『源氏物語』はもちろん日本文学の最高の作品だと思いますけれども、個人的に言って、私にはそんなにアピールしないですね。それは客観的な良し悪しじゃなくて、個人の趣味の問題です。あるいは感受性の問題かな。私の感受性が足りなかったと思います。平安時代の文学に関しては。

しかし、そういう英訳によるクラシック、古典文学も読みましたけれども、多くは現代文学の英訳を読んだんですね。特にはっきり覚えているのは、太宰治と三島由紀夫の作品です。2人の作品は、非常にきれいな英語に翻訳されて、アメリカの公立図書館に行けば、大体その訳を手に入れることができました。ですから、私は、太宰治、あるいは三島由紀夫を盛んに読んだんですね。後で分かったことなんですけど、お二人は非常に仲悪く、三島さんは太宰の人生とか生き方をかなり軽蔑的に見てたらしいですけれども、当時の私は、2人の作品、同じぐらいの関心を持って読みました。

当時の日本の文学、特に英訳された文学についての印象ですね。客観的に見て、日本文学の概説じゃなくて、50年代、60年代、70年代に英訳された日本文学。それに接して受けた印象ですね。そういう日本の現代の純文学は、どちらかということかなり暗い、英語で言うとアウトサイダー的な、異端的、異常な雰囲気のものが多かったように思います。太宰治の『斜陽』、あるいは『人間失格』。英語で言います。『斜陽』は『*The Setting Sun*』。『人間失格』は『*No Longer Human*』ですね。その主人公たち。あるいは、三島由紀夫の『仮面の告白 (*Confessions of a Mask*)』や『金閣寺 (*The Temple of the Golden Pavilion*)』の主人公たちは、考えようによっては病的に近いほどアウトサイダーでした。

あるいは、そういうアウトサイダーではない場

合は、多くの他の小説の主人公たちは、非常に恵まれた生き方ができた階級のものでした。永井荷風、川端康成、後で私の専門になった谷崎潤一郎の作中の人物を思い出していただきたいです。非常に特殊な、経済的に恵まれた階級の人たちが多いんですね。いわゆる典型的な日本人ではないです。それを言いたいです。太宰にしても三島にしても、川端、谷崎にしても、典型的な普通の日本人ではなくて、特殊。あるいは暗くてアウトサイダー的、あるいは大変恵まれて、非常に快樂にふけるタイプの人物です。かなり偏っていたと思います。しかし、そういうものが英訳されて、少なくとも私にはアピールしたんです。魅力を感じましたね。

しかし、現代の日本に留学生として来て、住んで、そして今、25年間ぐらい教鞭を執って、日本の大学で教えていると、現代の日本はもっと明るく日常的で、平穩で、ある意味で平凡な、普通の国だと思います。それはごく自然で、当たり前のことですが、最初は異国的趣味で、耽美的な文学に接した若い時の僕にとっては、ちょっと意外なことでした。日本の日常生活、実際の日本の日常性に少しびっくりしたんですね。

例えば具体的に、いろんなタイプの大学生をこの25年間で見てきましたけれども、『金閣寺』に出てくる柏木とか溝口のような若者を見たことはありません。それは幸いなことでしょう。とにかくいませんね。あるいはまた、今は、例えばタトゥーとか入れ墨は六本木のある遊び好きの若者たちの間に流行ってるようなんですけれども、これは、谷崎潤一郎の初期の作品『刺青』、入れ墨のような意味合いとはだいぶ違うと思います。ファッションですね。つまり、私が住んできた日本は、文学で描かれた日本より日常的で、平穩な国です。皆さんにとってそれは全然驚きじゃないでしょうけど、私にとっては驚きでした。

また自分の話に戻ります。大学時代は英文学と日本語を専攻にして、ミネソタ州立大学からB.A., 学士、を取りました。大学院は、最初はイェールを1年間。それから、ハーバードに移りまし

た。日本文学、宗教文化を専攻にして、ハーバードから **Ph. D.**、文学博士、を取りました。10代から、アメリカで日本の言語と文学を教えるか、あるいは日本で英米の言語と文学を教えるか、どちらになるだろうと思ってましたが、実際は両方をする事になりました。アメリカの二つの州立大学、カンザス大学、そしてミネソタ大学で日本語、日本文学、日本宗教を教えて、日本の二つの私立大学、立教大学の助教授、駿河台大学の教授として、英米関係の言語、文学、文化を教えました。ですから、両方をやったわけです。どちらかというとは私は、言語より文学の方が好きなんです。勉強の対象としても、教える中身としても、しかし、アメリカでも言語と文学、日本でも言語と文学ということになりました。大体そうなるんです。文学専門の者は、言語も教えます。だけど、僕は言語学者じゃないです。文学者じゃないけど、文学を専門としてきた者です。

アメリカで日本語を教える場合は、受ける学生は自由を選択して、好きでやってるんですね。ですから、かなり熱心です。その意味で、教えやすいです。日本の場合は、幸か不幸か必修科目です。必修科目だから、関心を持つてる学生、あんまり関心のない学生、さまざまですから、その意味でちょっと教えるににくいです。同じクラスの中で、レベルがかなり違う。才能のレベルもそうだけでも、関心のレベルもそうです。むしろ関心のレベルの方が大事だと思います。関心がなければ、外国語を習うことはできないと思います。その意味で、英語は国際語。どこへ行っても学んで、場合によって使わなければなりません。日本語はそこまでいかないで、やはり関心を持って、日本の文化が好きとか、日本と貿易したいとか、外交官になりたいとか、はっきりした目的を持って勉強しますので、かなり熱心に勉強するんです。日本における英語と、アメリカにおける日本語との違いの一つじゃないかと思います。

そしてもう一つ、これは自分について言っているわけですが、外国語を学ぶのがかなり得意でも、外国語を教えることが上手かどうかと、別問題で

すね。外国語を学ぶことと外国語を教えることとのスキル、技能が違うと思いますので、皆さん親かな人が、マッカーシーはかなり日本語を学んでいて、かなり使えるから、「じゃあ、英語を教えるのもすごく上手でしょう」と言ってくれますけれども、別にそうとは限りません。日本語をゼロから習ったから、外国人に日本語を教えるのが上手なはず。彼らのぶつかってる問題が、分かりませんから。だけど、僕にとって英語は母国語ですから、ゼロからじゃないにしても、初級・中級英語を勉強してる日本の学生、中国の学生たちにどうやって教えればいいのか、時々迷うことがあります。皆さんがおっしゃっていることは分かりますが、ネイティブスピーカーだから上手に教えられるとは限りません。関心のレベルと、また、トレーニングの問題ですね。それは、自分でも反省してます。

皆さんお分かりだと思いますけど、**Ph. D.**を取るためには、博士論文を書かなければなりません。自分の趣味に従ったならば、私は、さっき話した永井荷風とか三島由紀夫の文学を論じたかもしれませんが、実は10年か15年ぐらい前、この大学で講演をなさった、エドワード・サイデンステッカー先生という方がおられました。サイデンステッカー先生は、4、5年ぐらい前、日本で亡くなりましたけれども、その先生が素晴らしい永井荷風の研究書と翻訳書をすでに発表しましたので、荷風はノー・タッチと思いました。

三島さんは、まだ存命中でした、私が研究し始めたときは。三島さんが亡くなったのは、ちょうど45年前ですね。1970年。皆さん、日にちを覚えていますか。1970年11月25日。なぜその日を選んだか、いろんな説がありますけれども、一つは、吉田松陰が死刑された日だからです。三島さんは、吉田松陰を大変な英雄として見なしていたんですね。手本と見なしていたでしょうから、多分、それもあって、11月25日を選んだんじゃないでしょうか。年齢は45歳。それから45年がたってます。今、生きていらっしゃるならば、90歳です。でも、恐らく自分の90歳を見たくはなかったと思います。

三島さんは。

では、三島さんの話になりましたから、それもちょっと写真をお見せします。これは、松竹会社、新橋演舞場の関係者。私の知り合いで、私は三島文学が大好きで、「できたら会いたい」と言ったら、劇のリハーサルのときに三島さんが来るから、紹介しましょうということで、それで会って、何回かお話しできて、そして、あんまり効き目がなかったですけど、三島さんが私に武道を紹介したかったんです。ですから、剣道を見に行こうということで、どこかの警察の学校だったと思います。その剣道の道場へ、私を案内してくださった。そのときに僕は、非常に暗かったし、ほんとに安っぽいカメラしかなかったから、非常に下手で、「これ、ほんとに三島さんかな」と思ったりするかもしれないけど、ほんとに三島さんです。剣道を着る三島さん。1965年ぐらいですね。40歳のとき。

それから、おうちにも招待されたんです。これはよく撮れてると思います。三島さんと、お嬢さんと坊ちゃんですね。これは有名なアポロ像です。好き嫌いはいろいろありますけども、三島さんのギリシャ古典趣味の表れとして、自分の庭の中にこういうアポロ像が置いてあったんです。三島さんと、お嬢さんと坊ちゃんです。最後は、お昼に招かれたから、三島さんの奥さんが、私たちの写真を撮ってくれました。これは、先日整理して出てきたばかりですが、廣野先生と相談して、こういうパーソナルな写真、見せるべきかどうかと。見せた方がいいんじゃないか、関心持ってもらえるかもしれないということで、三島さんと、礼儀を知らないアメリカの若者で、半分あぐらをかいている私の写真です。

はい。途中、写真を見せることになりましたけれども、とにかく私が、荷風はサイデンステッカー先生のもので、三島さんはまだ存命中ですから、結局、指導教授のハウワード・ヒベット先生のご専門である谷崎文学を選んだんです。自分の趣味よりも、教授の影響が強かったです。その中で私は、やっぱり初期の作品を選んだのです。中期の多くの作品は、それこそ平安調ですね。平安の物

語の影響が多くあって、僕は引かれなかった。それより初期の、ちょっとグロテスクな、ナンセンス的などところにひかれました。『刺青』とか『秘密』とか、『小さな王国』とか『少年』とか、そういうものを自分の博士論文のテーマとして取りました。

私は、さっき言ったように、今、はやっている理論的、学問的と言える文体で書かれてる論文には、あんまり魅力を感じないんです。関心があまり湧かないということを感じていましたが、でも博士論文ぐらい書かなくちゃだめですね。それは、ユニオン・カード、組合カードみたいなもので、書かなければ大学で勤められません。だけど、その中から、例えばエッセイとか小論文を多少出したんですが、基本的に僕の趣味は、翻訳になりました。文学の研究というよりも、好きな優れた文学作品の英訳。それを、私が自分の分野として選びました。

谷崎先生の子供時代の回想録『幼少時代』を、『Childhood Years』として私が訳しました。今、残念ながらもありませんけど、講談社インターナショナルがそれを出してくださった。紹介は、ほんとに大事なことなんですね。アメリカのヒベット先生と、もう1人のアメリカの友人を通して、谷崎先生はもう亡くなってたんですけども、谷崎先生の未亡人、松子夫人とお会いできたんです。その写真を見せましょう、もうちょっとしたら。松子夫人を通して講談社インターナショナルの編集者に紹介してもらって、『Childhood Years』の英訳を出すことができたんです。最初は講談社インターナショナルだけですけども、イギリスで、コリンズとかフラミンゴという大きな出版社も出してくれたんですね。だから、よかったです。これは、松子夫人のおかげです。松子夫人が、「亡くなった主人の『幼少時代』を英訳したいという人がいますけれども、いかがですか」と言ってくれたから、講談社インターと縁ができたんですね。その『幼少時代』の英訳は、完璧とは言えないんですが。特に最初のものでしたから。だけど、多くの書評がかなりよくて、出ることになりました。

それから、谷崎の初期の短編幾つか。そして、

中編小説。谷崎をまだ読んでいない方、特にお若い方で「谷崎、ちょっと味わってみたいな」と思えば、お勧めするのは、私の大好きな中編小説、『猫と庄造と二人のをんな』です。庄造は名前です。大阪が舞台になっていて、ある主人公が、何より猫が好きなんです。リリーという猫を飼ってるんです。奥さんもいるけれども、あんまりうまくいかない。そして、二番めの奥さんも来るけれども、それもあんまりうまくいかない。だから、まさに『猫と庄造と二人のをんな』。私の英訳では、『A Cat, a Man, and Two Women』にしました。お勧めします。そういう3, 4冊ぐらい、谷崎のものを英訳したんです。

その他にですね、中島敦の作品。皆さん、特に年配の方はご存じでしょう。よく高校の国語の教材として使われます。『山月記』とか『名人伝』とか、『李陵』とか、1930年代ですね。30年代の後半、40年代の初めにかけて活躍した作家です。その中国関係の短編を、1冊にして出したんです。それから、現在も活躍していらっしゃる、文学に関心のある人は名前をご存知でしょうけど、金井美恵子さん。非常に前衛的な詩人兼小説家。目白に住んでいらっしゃるんですね。目白をベースにして、4冊ぐらいの小説を書いています。目白シリーズですね。その方のもも2冊訳しました。特に、私も猫好きですので、それは谷崎の影響というわけじゃないです。元から、小さい時から大変猫好きで、金井さんの小説の中で『タマヤ』『Oh, Tama』、タマは猫です。『タマヤ』というちょっとコミカルな小説を、私は訳しました。Eブックとして黒田藩プレスが出ています。

そういうわけで、谷崎文学、中島文学、金井美恵子文学。小説、エッセイ、そして、ポエトリーも英訳してみました。結局、自分が好きな文学作品を外国語で読んで、自分の母国語で表すという試みは、チャレンジで面白いです。そして、勉強になります。日本語はもちろん、母国の英語でも勉強になります。原文を英語に訳することによって。序文も書きますので、自分の意見や感想を述べられます。学問的ではなくて、一般読者向け

に。自分の趣味嗜好を弁護することになりますけど、りっぱな研究書を書いても、読んでくれる人が100人ぐらいの学者ですね、専門家。しかし、名作をうまく英訳したら、何千人、場合によっては何万人も読んでくれるんです。ですから、私は、翻訳の仕事をしてもらって大変うれしく思っています。学問的にはそんなに重視されませんが、実際役に立てるものだと思います。場合によって、研究より翻訳ですね。少なくとも多くの読者にアピールするから。ですから、非常に楽しいことです。興味が湧く仕事です。そして、駿河台大学で私の好きな文学の翻訳を業績の一種として認めてくださったことに対しては、私はまた感謝しなければなりません。

今、ちょっと谷崎松子夫人の話に触れましたけれども、写真をお見せします。これは、非常に優雅な日本料理のレストランに私は招待されたんですが、これは奥さんですね。70代でも大変美しい方でした。いつも和服姿で。元、大阪船場の生まれですね。きれいな関西弁でした。そして、今度は40歳ぐらいの私です。

あとですね、翻訳の問題について、もうちょっと話させてください。さっき言ったんですが研究書より、はるかに多くの読者を得られる。それがいいところだと思います。もう一つは、かなりクリエイティブ、独創的な面もあります。もちろん文学の創作ほどではないですけども、何と言いますか、原作を再生とでも言うのでしょうか。作家がシンフォニーの作曲家だとすれば、翻訳者は、指揮者のようなものだと思います。ですから、セコンダリー・クリエイティブですね。指揮者がクリエイティブなことをやっていると思うのであれば、翻訳家もクリエイティブなことをやっています。

原作、原文の正確な理解が必要です。それから、新しい手法で、良い模倣を行わなければなりません。この良い模倣の段階で、かなりクリエイティブにならなくちゃだめだと思います。この言語上の独創性は、翻訳を芸術の一種にしたいと思います。技術だけではなく、芸術だと思います。ですから、

文学の翻訳は、決してコンピューターに委ねることはできないはずで。他のテクニカルなものだったならば、コンピューターがますます発達して翻訳できるけれども、恐らく純文学は、コンピューターが絶対やれないと思います。偏見があるかもしれませんが、私は確信しています。

最後に、また二つのことを主張したいと思います。完璧な文学の翻訳、決定的な文学の翻訳は、ありえないということです。必ず間違いがあるんです。誤解。そして、誤解まで行かなくても、趣味嗜好によって主観的に表現などが変わりますので、一つの原文に対して、一つのパーフェクトな英訳とかドイツ語訳、フランス語訳は、ないだろうと思います。

一つのいい例として、『源氏物語』があります。日本語でも、『源氏物語』の現代語訳は幾つもあるでしょう。与謝野晶子源氏、田地文子源氏、谷崎潤一郎源氏、2回ほど。戦時中と戦後。戦時中は、全部は書けなかったんですね。検閲がありました。戦後は自由に書けた。瀬戸内晴美、寂聴さんもいらっしゃいます。私の知ってる限りでもこれだけあり、他にもあるかもしれない。現代翻訳はいっぱいある。英語も同じですよ。かの有名なアーサー・ウェイリーの源氏。それに、エドワード・サイデンステッカーの源氏、ロイヤル・タイラーの源氏、つい最近デニスワッシュバーンの源氏。莫大なエネルギーと努力が必要ですけども、少なくとも4回、別々の人がチャレンジして、それぞれ読んでいて、雰囲気は違います。これがいい、これが悪いとはなかなか言えないですよ。主観的な要素が多いですから。

もう一つ、時々、日本の方が、「あなたは、翻訳する場合はどちらからどちらに？」と聞かれます。それは、皆さん、考えてみてください。自分の母国語の方が、必ずよく分かるんですよ、外国語よりも。まあ、バイリンガルの方は、いるかもしれない。でも、非常に少ないですね。ですから、外国語で書いてあるテキストを一生懸命理解しようとして、辞書を使って、友人に聞いて、いろいろ考えて、それから、自分の言葉、生まれたときか

ら習ってる言葉、自分の一部である言葉に訳します。ですから、外国語から母国語へと訳します。私の場合は、日本語から英語に訳します。逆はしません。英語の原文はよく分かります。だけど、それに当たる日本語のニュアンスとか、文体のデリケートなところは、私はわかりません。ネイティブスピーカーじゃありませんから。ですから、皆さん、ほとんどの翻訳家は、外国語から母国語へと訳します。

最後にですね、繰り返しになりますけど、紹介が大事であると。私は、新橋演舞場の方を通して三島さんと会った。三島さんを通して、ハウスパーティーでハーバード大学のハウワード・ヒベット先生と会った。私の指導教授になった方で3年ぐらい後。そういう、人生において、仲立ち、紹介がすごく大事だと痛感します。特にアジアの国、日本、恐らく中国、韓国もそうでしょう。そして、アメリカでもやはり大事です。

同じように、例えばイェール大学に1年しかいなかったけれども、ロイ・アンドルー・ミラー先生が大変親切で、自分がハワイ大学に夏の間、日本語というテーマで講演するから、私に奨学金を得させて、「来なさい」というわけでした。だから、ミラー先生の科目を受けるためにハワイに行ったんですけども、同時に、一つの科目だけじゃ面白くないから、中村光夫先生が同時に日本から来て、日本文学を日本語で教えていました。ですから、ある意味、ミラー先生を通して中村先生と会ったんです。また、日本に行ったら中村先生と何回も会って、いろんな文学についての貴重な話をさせていただきました。そして、「ぜひ一度会った方がいい」と先生がおっしゃいましたから、同じ鎌倉にお住まいの川端康成先生に紹介していただいたんです。1回だけ川端先生のおうちに行って、お話を聴いて、サイン入りの短編集をいただきました。私の宝物の一つです。紹介の大事さということの好例だと思います。

そして、人と会うだけじゃなくて、その著名な人のアドバイス、助言をいただくことも大事ですね。ただし、若い人は、そのありがたさが分から

ないところが多いのです。私もそうでした。例えば、中村光夫先生から正直に言われた。現代文学を趣味として読んで、楽しめばいい。研究の対象として、翻訳するものとしては、古典文学をやった方がいいんじゃないかとおっしゃいました。考えてみればそうかもしれませんね。でも、私は、近代・現代文学という線でやり続けました。三島さんは、日本の武道が大事です。剣道でもいい、空手でもいい、「何か武道を習った方がいいんじゃないですか」と。ごらんのとおり、やっています。全然やっていません。典型的な文学青年でした。今、文学青年じゃなくて、文学初老者ですね。ですから、アドバイスは貴重なものですが、それに従うかどうかということは個人の問題です。皆さん、特に若い人たちよー、素晴らしい人に出会ったら真面目に聞いて、アドバイスを無駄にしないでください。それが私のアドバイスです。

谷崎松子夫人は、アドバイスはしなかったけれども、結局、その生き方ですね。大変美しい方、日本美の結晶みたいな感じでした。生きている姿そのものが。大変印象的でした。言葉も動作も、和服の姿も、全部美しく感じました。僕が少し谷崎文学の古典的な美を理解しているとすれば、多分、松子夫人とお会いできたからだと思います。何回か会ってくださって、歌舞伎とか日本舞踊に連れて行ってくださったし、個人的な話ですが、ちょうど日本にいるとき私の母が死んだんですね。そのときの松子夫人は、故郷から遠く離れている私に対して、本当に優しい同情を見せてくださいました。

そして、いつもいつも丁寧でした。知ってる人だけに対してだけじゃなくて。谷崎潤一郎の展示会があったんですね。どっかの大きな百貨店で。銀座だったか、池袋、新宿、覚えてませんが、大きな展示会に招いてくださった。私は、松子夫人と一緒にいったんですが。非常に混んでいるんです。混雑していて、みんな争って展示品を見ようと思っているじゃないですか。ある中年の男性が、もちろんわざとじゃないですけども、ふいに、かなり強く松子夫人にぶつかったんです。私

なら怒るんですけど、松子夫人は自分の方から丁寧な言葉で謝って、あたかも自分が悪かったというような感じで謝ったんです。それを見ていて、ほんとに日本的な、伝統的な礼儀作法のお手本だと思いました。ですから、言葉によるアドバイスだけじゃなくて、人のエグザンプルを見ることも、大変勉強になると思います。

では、最後になりますので、ほとんど読むことにしますね。今、話してきたように、このようなりっぱな日本の方々に個人的にお会いできたことを、もちろん感謝しております。どうしてこういう人たちに会うことができたか考えるときは、時代というものを考慮に入れなければならないと思います。1960年代、70年代においては、日本語をかなり上手に話せて、しかも、日本文学、文化に関心を持っている北米人は、あまり多くはいませんでした。今は、そういう人はたくさんいます。ですから、今の日本の方は、日本で暮らして日本語がかなりできる外国人に出会うとか、テレビで見るとか、全然珍しくないんですね。しかし、当時は、かなり珍しかったですよ。その意味では私は、時代に恵まれたと思います。その時代では、私のような者が、そういうりっぱな素晴らしい方々と会えたんですね。今はどうでしょう。今、当時の私のような青年が、例えば村上春樹さんとか、大江健三郎さんと会って、いろいろお話ししたいと思っても、できるでしょうか。なかなか難しいと思います。だから、時代ですね。時代に恵まれたと思います。

それから、運というもの。あるいは仏教で言うカルマ、キリスト教で言う神の摂理。そういうスピリチュアルなものも、あったかもしれません。それから、前も触れたように、仲立ち、仲人、紹介者。そういう人たちがいらして、私はほんとに感謝しなくちゃならないと思います。

日本は、1980年代以来、より普通の国になったと思います。多くの外国人が住んでいますし、その中のかかりの人が、日本語が話せます。今では日本人は、そういう外国人に簡単に会える。あるいは、テレビで見ることができます。私たち外国人

は、もはや珍しい存在ではありません。私たちにとって、ちょっと寂しいかもしれませんが、ある意味で。しかし、日本にとっては、長い目で見ればとてもいいことだと思います。私の主観ですけども、日本がもっと日本人論とか、ユニークな日本とか、そういう考え方から脱却することができて、そして、日本が数多くの存在する世界の国々の中の素晴らしい一つであるということを受け入れる、認識するようになればなるほど、外国との関係がよりよくなって、日本の人と外国の人の関係が、日本においても外国においてもより豊かなものになるんじゃないかと思います。今日は私の個人的な思い出話と感想をご清聴くださって、ありがとうございます。

廣野 それでは、せっかくですので、この機会にマッカーシー先生にご質問がある方、どうぞご遠慮なく手を挙げていただければ、そちらへマイクをわたします。

A 大変興味のあるお話を、ありがとうございます。非常に感銘をいたしました。お話の中にございました、先生の今までの研究、勉強の内容でございませうけれど、例えば『方丈記』とか『徒然草』については、訳文でお読みになったというお話でございました。

全体を通して、日本の古典的な内容はどちらかというとなんとなくて、現代文学に関して中心にお読みになってるというか、研究されてるような感じを受けたわけでございますけれど、例えば現在、『方丈記』とか『徒然草』を、原文で先生がお読みになるようなことはございますでしょうか。例えば江戸時代の文学とか、あるいは、もうちょっと前の『太平記』とか『平家物語』ですね。この辺を、いわゆる訳文でなくて、原文で先生がお読みになってられるのかどうか、そういう質問でございます。

マッカーシー ありがとうございます。そうですね。『方丈記』は全部何回も読みました。短いので

ですね。『徒然草』は、少なくとも部分的に。でも、長い物語、『平家物語』とか『太平記』、もちろん『源氏物語』は、今もほんとに抜粋みたいな感じでしか読んでないです。『方丈記』は、大好きですので、何回も読んでいます。あとは、廣野先生の影響で、お能の謡曲のテキストを読んでいきますね。見に行く前に読んでおきます。

A 原文で。

マッカーシー 原文で、はい。今は、何とかして、古典でも少しは原文で読めます。当時は全然読めなかったですが。

廣野 他にご質問のある方、いらっしゃいませんか。せっかくなので、はい。

B マッカーシー先生、ありがとうございます。マッカーシー先生が翻訳された谷崎とか中島敦とか、金井美恵子とかということだったんですが、金井美恵子は現代の作家ですが、マッカーシー先生が現代の、物故作家ではなくて、今、生きている作家でこれからぜひ訳してみたいと注目をされている作家がいらしたら、ぜひご紹介ください。

マッカーシー あんまり広く、今、活躍していらっしゃる作家たちを読んでいませんけれども、例えば、三島さんのお弟子さんというのかな。高橋睦郎さんという詩人がいますね。高橋さんのものを、詩じゃなくて、何と言うのかな、『聖三角形』という3部作があります。聖は、**holy** ですね。三角形は **triangle** ですね。3部作ですけど、それを実際、今、やっています。第1部は英訳終わって、ハワイ大学のアンソロジーに入る予定です。残りの2作、僕もできたらやって、どこかの出版社から出してくれればいいなと思っています。ですから、三島文学系統の、高橋睦郎さんですね。

それから、金井美恵子さんの作品を2冊訳しました。『単語集』という非常に複雑で前衛的なものと、もっと親しみやすい『タマヤ』と。あとは、

金井さんが時々送ってくださいますから、読んでいるエッセイ集等があります。いつかまた金井さんのものを訳したいと思います。そして、これから読もうと思ってるのは、平野啓一郎さんです。

日文研の中西先生が、つよく『日蝕』をお勧めになったんですね。まだ読んでないんですけど、そのうち読みます。平野さんの『日蝕』と、もう一つ、「いちげつ」と読むらしいですね。『一月』と書いて「いちげつ」—そういう小説もありますけど、時間があれば読みたいと思います。そして、自分のいわゆる趣味に合ったら、そして平野さんが許していただければ、それも1冊ぐらいを訳してみたいと思います。

廣野 はい。

C 今日は、どうもありがとうございました。三島由紀夫が、昭和30年代、飯能に来まして、『美しい星』っていう小説を書いているんですけど、もしそれをお読みになって、ご感想があれば、一言お願いしたいと思うんですけど。

マッカーシー そういう小説があるということは知っておりますけれども、まだ読んでおりません。聞いた話では、純文学というよりちょっと大衆むけというか、週刊誌に載るようなものだそうですね。三島さんは、いろいろなさったんですね、幅広く。ですから、いつかは読むべき、飯能とは縁がありますから読むべきだと思いますけれども、訳されるかどうかは分かりません。

三島さんの一番優れた作品は、1冊だけ除いて、もうすでに英訳されています。『仮面の告白』『禁色』『潮騒』『金閣寺』『午後の曳航』『現代能楽集』。そして、最後の4部作『豊饒の海』。全部英訳されています。英訳されていないのは、『鏡子の家』。それは、三島さんが大変重視されたものだろうと思いますし、まだ誰もやってないのはちょっと変だと思えますけど、もし三島さんをやらせていただくのであれば、残念ながら『美しい星』じゃなくて、『鏡子の家』になるのかなと思います。

C ありがとうございます。

廣野 他にいらっしゃいますか。もしいらっしゃいませでしたら、主催者が質問するというのはちょっと違反かもしれませんが、もうちょっと時間がありますので。マッカーシー先生は、司馬遼太郎の『坂の上の雲』という作品を何人かの方々と一緒に英訳なさって、賞を受賞なさいました。時々「こういう苦労があったんだ」という話を僕にお話しくくださったことがありました。なかなか面白いと思いましたので。ぜひ皆さんにもご紹介できたらと思います。『坂の上の雲』の翻訳に当たって、どういうところに苦労なさったかということをお話いただければと思います。

マッカーシー 初歩的な問題ですがけれども、例えば、外国人、特にロシア人の名前ですね。片仮名として出ます。片仮名からロシア語、ドイツ語、フランス語などのローマ字にするのは、大変な苦労です。専門家に頼んで調べてもらうしかないんですね。ローマ字と片仮名はだいぶちがいます。私の名前なんて「マッカーシー」と皆さんがおっしゃるけれども、実は「マッカースイー」、**McCarthy** ですね。「マッカーシー」と「マッカースイー」のような差は、ロシア語でもドイツ語でも同じようにあります。ですから、それが一つ—外国の人名・地名。

あとは、先生ご専門の中国の件ですがけれども、ローマ字にするときは、今、大陸で使われているピンインを使おうか、それとも、われわれが昔から使っていたウェード・ジャイルズを使うかですね。これは、だいぶ違います。

廣野 題名については、いかがでしたか。『坂の上の雲』という。

マッカーシー ああ、はい。もっと面白いですね。『坂の上の雲』を直訳して、『**Clouds above the Hill**』になったんですね。ただ、ちょっと問題に

なったのは、英語では **clouds above the hill** という、**clouds** は暗いイメージですね、どちらかというと。雨が降るかもしれない。どうなるか分からない。それは、司馬さんの考えの中には、なかったではないかもしれませんがね。日露戦争は見事に成功しましたが、その影響で、30年後中国の方に入って、そして、アメリカとイギリスと戦って、必ずしもこのましい結果にはならなかったんですね。しかし、ほんとはその **clouds** は、むしろ明るいものでしょう。私が忘れましたが、ありますね。青年が、非常に希望に満ちた将来を持つて、何とか……。

廣野 青雲の志。

マッカーシー そうです。青雲の志ですね。セイは、「青い」ですか。**aspiration for the blue clouds** ですね。非常にいい、ポジティブな、楽観的なイメージ。それが主だったでしょう。だから、考えたんですね。例えば、『**Bright Clouds above the Hill**』とか、『**Shining Clouds above the Hill**』。それでもよかったけれども、**bright** や **shining** は原文にないので、直訳して『**Clouds above the Hill**』にしました。そして、海外の読者たちの、何と言いますか、感受性に委ねるといことにしました。読めば、日本にとって非常に輝かしい時代でした。素晴らしい、奇跡的なことを成したんですね、日露戦争。しかし、そのあとはまた暗い時代になります。その両方。でも、どちらかというと明るい方でしょう。司馬さんの考えでは。

あとは、また細かいことになりすけど、作中人物の女性はみんな、おたま、おやえ、おしんのように「お」が付くんですよ。それは、英語にするときはつけるべきかどうか。ただ「たま」にするか、それとも「おたま」にするか。ただ「しん」にするか、「おしん」にするか。僕は「お」を保ちたかったんですけども、他の翻訳家たちは、ない方がいいと。それは名前の一部じゃなくて、単にかわいく付けるだけであると。「ちゃん」のような感じで、「たまちゃん」のような感じですから、

英語にするときは省いた方がいいと言われたのです。それで通ったんです。私が負けた。私としては好きですけどね、おたまの方が。おたま、おりんなどですね。

廣野 これまで、格調高い話になっているんですけども、ちょっと何と言うのか、スキャンダラスというか、週刊誌的なあれになるかもしれませんけども、谷崎松子夫人と日本舞踊をごらんになったときの話をしていただけませんか。具体的な女性の名前は、挙げていただかなくてもけっこうなで。

マッカーシー ありがとうございます。谷崎夫人が時々歌舞伎とか日本舞踊に連れていってくださったんですけども、あるときは、京舞ですね。京都の踊り。多分、国立小劇場でしたけれども、いろんな方が出ましたけれども、言っていていいでしょう。亡くなられた井上八千代さんが、大変な高齢でですね、美しく京舞を見せてくださった。そして、松子夫人は、「お上手でしょう。谷崎も、井上先生の舞いは大変好きだった」などと話されました。ずっと後で分かったことですけども、先生は、非常に松子夫人を大事にしました。ほんとに心から愛していましたけれども、男はね、やっぱり晩年には時々浮気されたいらしいです。その浮気の相手の一人は、井上八千代さんといううわさがあります。後から聞いたんですね。これも、やはり礼儀作法のお手本でしょう。そういうことに一切触れないで、ただ井上先生の京舞の美しさを私に指摘して、エンジョイされていました。でも、そのうわさは本当かどうかは知りません。しかし、後からそれを聞いていて、一層感銘を受けました。

本当に松子夫人は、谷崎さんにとっては大変大事な存在でした。ご存じですか。3回結婚されたんですね。1回めは千代子夫人と。千代子夫人は、模範的すぎたらしいですね。非常に、何と言いますか、褒められるべき良妻賢母的な存在だったんです。しかし、谷崎は耽美派で、やっぱりもっと

エロチックなところのある女性が当時好きでしたから、心が離れることになりましたんですね。で、佐藤春夫さんが千代子夫人のことをかわいそうに思って、親しくなって、結果的には谷崎さんと千代子夫人が分かれて、千代子夫人が佐藤春夫さんの奥さんになったんですね。それが一つ。それから、2番めの結婚は短かったです。丁未子夫人という、関西の大変な美人でした。恐らくその顔を見て、谷崎先生の好みが分かります。大変美しいけれども、なぜか分からないが、短かった。別れた。

最後は、松子夫人に出会ったです。松子夫人は他人の奥さんでしたけれども、根津さんという、根津美術館があるでしょう。あの根津家の奥さんだったんですが、やはり根津さんと松子夫人がちょっとうまくいかなくなって、谷崎さんが非常に

松子夫人が好きで、尊敬して、そして、何と言いますか、話し合って相談して、松子夫人が根津さんと別れて、離婚して、谷崎さんの奥さんになりました。3番めの結婚は大成功で、ほんとにお二人とも大変幸せだった。だから、さっきのうわさはほんとじゃないと思いたいけれども、でも、分かりませんね、人間の心は。

廣野 どうもありがとうございます。小説というのはゴシップの子孫であると、たしか丸谷才一が言ってたと思いますけども、そういうところに、ついつい僕なんか興味を持ってしまいます。今日は、マッカーシー先生にいろいろお話しいただいて、楽しい時間を過ごすことができました。最後にもう一度、マッカーシー先生に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございます。